

毎日が日曜日に、分銅や鯨(はしけ)が出てくる意外性。

643ページの分厚い文庫本。久々に、小説を読んだ、しかも、城山三郎。「男子の本懐」以来か。

「沖君、京都へ行けば、毎日が日曜日だな」

声には、冷ややかなひびきがあった。社内では毒舌家で通っている十文字である。

・・・

「それは、どういう意味だ」

「まず、仕事の量だ。本社や海外支店にくらべりゃ、問題にならん。その証拠に、総合商社で京都に支店を置いてる店は、数えるほどしかないからな」

「奥さんを前にしてわるいけど、あの支店の実質は、出張所なみか、それ以下。不況のたびに、閉鎖のうわさがちらついてきた店ですよ」

・・・

「けどなあ、奥さん。やっぱり、京都支店長というのは、栄転かも知れませんぜ」

「厳密にいうなら、今度が栄転というより、次の栄転へのチャンスだな。それも、心がけしだい、大きな出世の道がひらけるかも知れん」

・・・

「まあ、よくきけ。大事な話は、その先にある。それは、トップの世話だ。京都は、社長や、おえら方たちが息抜きするところ、秘密のあそび場所なんだ。会社の関係者は居らんし、マスコミも追いかけて来ん。安心して羽をのばせる聖域なんだ。京都支店長は、そのお世話をしながら、見たりきいたりしたことは、一切口にしてはならん。トップの恥部をかくしながら、自分は唾(おし)になれる人間でないと、いかんだ」

「おれには、とても……」

「まあ、よくきけ。トップの恥部をつかむだけに、忠勤を励めば、そこは、人間と人間。可愛いやつということになる。コンピュータを乗り越えて、抜擢の道がひらける。左遷どころか、心がけしだい、大栄転へのチャンスになるというのは、そのところだ」

「京都へ何しに行くんですか」

「うーん」と、笹上は一度だけ行ってから、

「そんなことは考えてない。とにかく、ぼわっと、京都へ行きたくなつたんだ。何をするかは、着いてから考えるさ。とにかく、おれは、本当に、毎日が日曜日の身分になるんだからね」

問題児をかかえていようと、何が起ろうと、和代は、寝つきだけはいい。うらやましいほど、よく眠る女であった。それが、沖には救いにもなる。

金曜日の午後、主婦たちの間には、一種、色めき立つ空気がある。セットしたばかりの髪のおい。化粧のおい。湯上りのおい。夫との心ゆくばかりの夜に向かつての身づくろい。あまく、なまめかしい空気をまき散らして、主婦たちは歩く。

アメリカでも、金曜日の夜には、やはり色めき立つものがあつた。ただ、その空気は、もっと開放的であつた。お互いに、招いたり、招かれたり。家庭というものが、いっせいに外に向かつて開かれるような感じのにぎやかさがある。

留守中たまっていた郵便物に目を通し終わると、時計は十二時半。

「お風呂がわいてるんだけど・……」

「入ろう」そういつてから、沖は声をはり上げた。「おまえも、いっしょに入ろう」

和代は、眼を大きくした。その眼のまわりに桜色をにじませながら、

「……どうして」

「どうしても、こうしても、あるものか。いっしょに入ろう」

せまい湯船の中で、二人は体を寄せ合つた。あたたかく、やわらかな体。乳房にも、ふれた。和代は声を殺す。夫婦のたのしみ、わるくない。ひとりぐらしの笹上には、無縁のたのしみのはずである。透明な湯ごと、和代を膝の上に抱き上げるようにしながら、わるくはないと、沖はまた思った。不都合なのは、二十日か、一ヵ月に一度しか会えないことだ。

(扶桑商事では、社内の書類はすべてカタカナ書きである)

赤帽

「はい……。ワタシハ、アリニナレル。ワタシハ、トンボニナレル。シカモ、ワタシハ、人間デアル」

それは、社内から募集したものの中から、和地社長が選び、自ら筆を加えたといわれる新時代の社訓であつた。

商社マンは、アリのように勤勉で、どこへでも出かけて、骨惜しみせず、働かねばならない。商社マンはまた、幅広い勉強をし、トンボのような複眼で、物事を考えるようにならねばならない。しかも、アリであり、トンボであると同時に、人間でなくてはならない。教養も積み、常識もある人間。市民社会の中に受け入れられる人間になるよう努力しよう——という呼びかけであつた。

・・・

「わしなら、あのモットーは訂正させる。シカモ、ワタシハ人間デアル、は、とっばらつて、シカモ、ワタシハ鬼デアル、といわせるのや」

「鬼ですつて」

沖は、身ぶるいしそうな気がして、きき返した。

「そうや、鬼や」

「どういう鬼ですか」

「きまってやないか。仕事の鬼、商売の鬼や。アリデアリニナレル、トンボデアリ、シカモ鬼デアル。どや、ええやろう。土性骨が、ぴんと通っとるやないの」

「……………」

「わしらは、みんな、この気持でやってきたんや。どのひとつが欠けても、今日の扶桑商事は、あらへんで。人間なんてこと考えてたら、うちの会社はとっくにつぶれてた。いや、日本の今日かてあらへん。きみらだって、輸出立国の鬼のつもりで、がんばってきたはずや。みんな、そうや。みんなのそういう気持が重なって、この何にもない日本が食って行けるようになったんや。あまつたれた気持では、たちまち、一億が飢え死にせんらん。その最前線が、われわれ商社や。毛唐を相手に、鬼にならんと、とって食われてしまうんや」

和代は、よく話をむし返す。沖は、ふきげんになった。

「その話は、もう終わってるじゃないか。オートバイがなかったら、あいつは、ツーソンで完全に神経衰弱になってた。向うへ行ったら、ああするより仕方がなかったんだ」

とどめをさしたと思ったのだが、和代はさらに、むし返した。

「つまり、アメリカへ行ったことが、わるいのね」

「えっ」

ア

アメリカでは、孤独な退職者たちは、ニューヨークなどの大都会へ集まる。スモッグの谷底でベンチに坐る老人たちの姿は、最初はあわれなものに見えた。だが、アメリカの事情に通じてみると、地方ぐらしの老人や、地方からぬけられない老人たちの方が、もっと悲惨で、やりきれない生活をしていることがわかった。孤独な退職者たちにとって、スモッグ以上におそろしいのが、退屈さである。さまざまな刺戟に満ち、雑然とした大都会は、退屈さをまぎらわせてくれる。孤独な退職者には、大都会こそよく似合った。

このため、笹上は、老後を過すヒ地としては、東京以外を考えたことがなかった。動物園や盛り場の他、公園や百貨店、有料無料の各種催し物。ときには、横浜へ足をのばし、ふらりと羽田空港へ行ってみることもある。

ふたたび、笹上のことを考えた。

だれとも、まるで口をきくことのない生活。たとえ毎日が日曜日だとしても、そこに、たのしみがあるものなのだろうか。

「それじゃ、これから、つき合ってくれるか」
「つき合う？ それ、どんな形でっしゃろ」
「……いろいろ、あるだろう」
「それは……。けど、やっぱ、お茶屋さんを通していただかんと」
「え？」
「このお電話したのも、実はそのことでんがな」
「そのこととは、どういうことだ」
「今回の東京行き。一日は笹上さんに、夜までお伴しましたでっしゃろ。その遠出の花代、どちらへ請求したらよろしか思うて」
「花代だつて」
「さいです。お茶屋さんに断わって出かけましたさかい」
「……いくらだ」
「それは、お茶屋さんに、きいとくりゃあす」
「……………」

「平凡な話だが、いちばんいいのは、生計の道は別にあつて、気が向いたときだけ、釣りに行くというくらしじゃないのかね」

手術は、二時間十分かかった。

運び出されてきた忍の顔には、汗がふき出していた。目を見開いて、沖たちを認めたあと、忍はほっとしたように、また目を閉じた。

和代たち三人があとをついて行き、沖は執刀医に様子をきくため残った。

小肥りで、下り眉をした医者、沖に会うと、微笑していった。

「どうです、切った足の部分を見ますか」

「とんでもない」

沖は、はげしく首を横に振った。切りとられた足も、残った足も、沖は無残で見る気になれない。膝から下、しかも足首から先のない足というのは、考えてみるだけで、寒気がした。

医者は、沖の目を見すえたまま、いった。

「問題は、ガーゼだけじゃありませんよ。足に分銅をつるしておきましたからね」

「分銅というと……」

その場に似合わぬ言葉なので、沖は、きき返した。医者は、手で形をつくつて、

「五キロの重さですがね」

ぎりぎりまで切りとったため、皮膚で傷口を蔽えないだけではない。少しでも、ま

わりの肉がちぢむと、骨がとび出してしまふ。

このため、肉をちぢませないように、太い針金を八本、そのはしをカギ状にして、肉にくいこませ、もう一方のはしに、分銅がつるしてあるのだという。体に神経など走っていないかのような荒療治であった。だが、それより他に救いがないのであろう。命を失えば、まちがいなく地獄。しかし、この先、生きのびることも、忍にとって、また地獄の連続のようであった。

「こんなに苦しんできたんだもの。いつか、きっと、いいことがあるよね」

「お嫁さんですよ。ぼくみたいなところへ、お嫁さんが来てくれますかね」